

坂出・綾歌支部 研究のあゆみ

1 研究主題

子どもが自ら学ぶ国語科学習の展開
—付けたい力を明確にし、その力につながる子どもの「関心」を高めたり
「自信」をもたせたりする授業づくり—

2 研究活動の概要

- (1) 4月18日 研究組織作り，研究主題の設定，研究計画立案
- (2) 6月 6日 研究授業①(坂出 林田小学校)
4年「走れ」
- (3) 10月17日 研究授業②(綾歌 昭和小学校)
3年「はりねずみと金貨」

3 研究内容

(1) 研究授業①より

本单元では，中心人物の気持ちをとらえ，リーフレットにまとめる活動を通して，登場人物の気持ちの変化や性格，情景について読む力やまとめる力を育成することをねらいとして学習を進めた。

本時は，中心人物の気持ちが大きく変わった場面のわけを考える学習を展開していた。

前時で中心人物の気持ちが大きく変わったのは，家族の応援があったからだと感じていた子どもたちは，そのわけを考えたいという課題意識をもち，本時の学習に取り組んでいった。中心人物について書かれた叙述を全体で整理していく中で，「走ること」と「家族のこと」の二つの理由で中心人物が悩んでいると理解することができた。また，家族の応援があったからこそ気持ちが大きく変わったことにも気付く姿が見られた。次に自分なりに家族の応援が中心人物にとってどのような言葉であるかを考えた。「走る勇気をくれた」「つらさを吹き飛ばしてくれた」など言葉の重みについて考えることができた。

授業後の討議では，黒板に人間関係図や言葉を書き示す位置など板書の工夫について話し合い，付けたい力を育むために有効な言語活動の設定，学習の展開の仕方のご指導をいただいた。

(2) 研究授業②より

本单元では，子ども一人一作品おすすめの本を選び，ブックスタンドを作るという活動を通して，人物の行動に即して起きた出来事を確認，文章の要点に注意し，あらすじをまとめる力を付けることをねらいとして学習を展開していった。

本時は，伝えたいことが伝わるあらすじにするためにはどうすればいいか考え，全体のあらすじをまとめる学習を展開していった。

導入で自分のあらすじを音読した子どもたちは，そのまままとめると長いあらすじになることに気付き，単元全体のめあてをもった。既習の物語文で，分かりやすいあ

らすじにするためには繰り返している言葉を減らしたり、言い換えたりする方法が良いと気づき、伝えたいことが伝わる、分かりやすいあらすじを書こうと学習活動に取り組んだ。これらの活動から自分自身で比較し、違いに気付くことで、より分かりやすいあらすじが書けると実感できた。そして、その後の自分たちが選んだ本のあらすじを書く際には、あらすじを書く手法として使えるものになっていった。

授業後の討議では、あらすじを書いていくためのスキル(あらすじアイテム)を獲得しながら学習を進めていく過程が、子どもたちを意欲的にさせたなどの意見が出た。また、あらすじをまとめる際に「伝えたいこと」を念頭に置いて学習をすすめていくことの大切さについて話し合ったり、ご指導をいただいたりした。

4 県の研究との関連

【今年度の研究の成果】 関心を高める

- ・ どちらの授業研究でも、単元の始めにゴールを示しており、子どもたちが学びのゴールを見通して学習に臨めるようにしていた。授業研究①では、リーフレットを作成するために、中心人物の気持ちの変化を捉えることができていた。読み取れることが自信となり、堂々と発表することもできていた。授業研究②では、あらすじアイテムを獲得していくことがあらすじを書く活動への積み重ねとなっており、効果的であった。

【今年度の研究での課題】 自信をもたせる

- ・ 魅力的な単元末のゴールのおかげで子どもの意欲は高まっていた。どちらの研究授業でも、子どもがペアの話し合いに主体的に取り組んでいた。さらに深い学びを実現するためには、どのような手立てを講じれば有効な学び合いなのかを考えていきたい。

さぬき・東かがわ市部 研究のあゆみ

- 1 研究主題 子どもが主体的に学ぶ国語科学習の在り方
ー付けたい力に対する子どもの「関心」を高めたり「自信」をもたせたりする支援の工夫ー

2 研究活動の概要

- (1) 4月27日(金) 研究主題設定, 研究組織作り, 研究計画立案
(2) 6月12日(火) 研究授業 東かがわ市立引田小学校
2年 二つのせつめいをくらべよう
「ふろしきは、どんなぬの」
指導者 東部教育事務所 主任指導主事
(3) 9月 5日(水) 「ともしび」作文審査会
(4) 11月 6日(火) 研究授業 さぬき市立志度小学校
4年 比べ方を知り, 和と洋について調べたことを
しょうかいしよう「くらしの中の和と洋」
指導者 東部教育事務所 主任指導主事
(5) 1月18日(金) 児童文集「はらっぱ」編集作業

3 研究内容

- 6月の授業では, ふろしきについての二つの説明(デパートの売り場のカードと本の文章)を児童自身が視写したのを使い, 相違点について比較した。「事柄の順序」や「文章の構成」など, 児童に付けたい力を明確にし, ワークシート内で二つの文章を上下に対応させて貼ったり, カードにはア・イ・ウ, 本の文章には①~⑥とナンバリングしたりし, 低学年でも比較や相違点の説明がしやすいように支援されていた。
- 11月の授業では, 和室と洋室の「使い方」について比較し, よさや違いを読み取った後, 前時にまとめた表を参考に要約した。まとめたものを読み合う際の観点を「キーワードの使い方」「内容の正確さ」「文章の正しさ」に絞ることで, 児童に付けたい力を焦点化した。また, 要約の際の手がかりとなるよう, よさや違いをふせんに書き込ませておいたり, キーワードシールを準備したりして, 書くことを苦手とする児童にも取り組みやすい支援がされていた。

4 県の研究との関連

【今年度の研究での成果】付けたい力の明確化

- 児童に付けたい力を教師自身が明確に意識しておくことにより, 教材・教具や発問も, その力を付けるために必要なものへと洗練されていった。
- 見通しをもたせたり, 板書で色分けして分かりやすくしたり, 教具を工夫したりすることで, 「自分にもできそう」「してみようかな」という意欲につながっていた。

【今年度の研究での課題】自信をもたせる, もてる学習指導

- 書く活動にまとめた時間を確保することも大切なことではあるが, 自信をもちづらい児童にとっては不安な時間が続く。「前半を一斉に進めてから, 後半を個の活動にする」, 「途中で友達と交流し, 互いに確かめ合う」等, モデルを示したりスモールステップで進めたりする方が, より自信をもって活動を進められる学習につながるだろう。
- 効果のある交流にするためには, ねらいをしっかりとち, 具体的に観点を示すことが大切である。

高松市 研究のあゆみ

1 研究主題

子どもが言葉を通してつながり合う国語科授業の創造
～ともに学び深め合う、子ども主体の授業づくり～

2 研究活動の概要

- (1) 4月19日(木) 教科主任研修会(中央小学校)

・研究組織作り、研究主題の設定、年間計画作成

- (2) 6月7日(木) 第1回定例研修会(研究授業・討議)

北ブロック

下笠居小 2年 なりきり音読会を開こう「お手紙」

木太南小 2年 二つのせつめいをくらべよう「ふろしきはどんなぬの」

南ブロック

植田小 3年 昆虫博士になって虫の工夫を2年生に伝えよう「自然のかくし絵」

大野小 2年 場面ごとに読もう「お手紙」

- (3) 7月25日(月) 夏季研修会(高松第一小学校)

・教材研究 第5学年「注文の多い料理店」

・講演 香川大学 佐藤明宏教授「深め合う国語科の授業づくり」

- (4) 9月27日(木) 第2回定例研修会(研究授業・討議)

北ブロック

中央小 1年 音読劇発表会をしよう「サラダでげんき」

屋島西小 2年 声やうごきであらわそう「名前を見てちょうだい」

南ブロック

十河小 1年 もっとお母さんが元気になるようなサラダができるように手紙を書こう「サラダでげんき」

塩江小 1年 おかあさんがもっと元気になるサラダをつくろう「サラダでげんき」

3 研究内容

- (1) 学習の目的と単元の見通しを明確にした単元構想

子どもの実態把握や単元で付けたい力を見極め、子どもが関心をもち続け、主体的に学習できる単元構想を考える。

北ブロック

- ① 2年「お手紙」では、3年生を招待して「なりきり音読会」をしようという明確な目標があったため、意欲的に取り組むことができていた。音読に「なりきる」という条件を加えたことで、人物の気持ちを考える必要感が生まれ登場人物の具体的なイメージを想像でき、その児童の読みの解釈が見えてきた。

- ② 1年「サラダでげんき」では、ハートカードにそれぞれの場面で学んできたことが動物らしい言葉で書かれていた。自己選択の場を設定して単元を組んでいたのがよかった。

南ブロック

- ① 1年「サラダでげんき」では、アフリカゾウが登場する前に、自分の好きなものを紹介する手紙を書くという本時の学習活動を入れたのがよかった。よく練られた単元構成であった。

- ② 3年「自然のかくし絵」では、2年生に伝えようという明確なめあてがあるため、疑問を解決

してあげたいという意欲につながり、積極的に取り組むことができていた。

- ③ 1年「サラダでげんき」では、スモールステップで積み上げられており、最後の完成の場面で、子どもたちは達成感を感じたのではないかな。教材文もよく読み込んでいた。

(2) 1 単位時間の授業における指導過程の工夫

言語活動に沿った学習問題の設定、課題解決のための価値のある学び合いを効果的に取り入れた学習の進め方を考える。

北ブロック

- ① 2年「ふろしきはどんなぬの」では、2種類の文章の違いから、それぞれの良さを考えさせる手立てとして、「文が長いから」や「文字が多いから」等の板書があり、配慮がなされていた。
- ② 2年「お手紙」では、4人組やペアで話し合うのがよかった。「どうして幸せになったのかも」「どんな手紙だったのかな。」等の教師の言葉かけで、児童が考えをさらに深めることができていた。視覚的な支援が多く、学びの蓄積があった。
- ③ 2年「名前を見てちょうだい」では、話型・お面・紙コップなどを用意し、多くの手立てが打たれていた。一人一人へのノートのコメントもあり、目に見える支援がたくさんあった。

南ブロック

- ① 1年「お手紙」では、導入時に見せた単元はじめの音読ビデオによって自分たちを客観視でき、意欲付けや本時の学習問題の設定に大変効果的であった。
- ② 3年「自然のかくし絵」では、ペア活動で、ペーパーサートを動かすときに、説明内容が相手に理解できているかどうか確認しながら進めていたのがよかった。聞き手も話し手の話す内容を集中して聞き取ろうとしていた。

4 県の研究との関連

〔今年度の研究での成果〕

- 付けたい力を明確にし、主体的に学ぶ子どもの育成
付けたい力を明確にし、学習目標と学習活動を子どもに分かりやすいシンプルなものにしていた。それにより、子どもが主体的に授業に取り組み、自分自身の考えの深まりを自覚できた。
- 「自信」をもたせる
どの子も「できた」「自分でもできそうだ」と思えるように、子どもの実態を把握し、実態に即した授業を行うことができた。簡単な課題を全員で確かめながら解決し、徐々に難しい課題へとスモールステップで取り組むことで、子どもたちが自信をもって活動できていた。

〔今年度の研究での課題〕

- 目標に準拠した評価を確実に行うこと
ゴールで付けたい力を授業で見極めなくてはならない。集団の中ではなく、自分で自分のがんばりが認識できるよう、絶対評価を意識した指導を大切にする。評価は、教員が指導の改善を図るため、また、児童が自らの学びを振り返って次の学びに向かうために行う。

仲多度郡・善通寺市部 研究のあゆみ

1 研究主題 子どもが自ら学ぶ国語科学習の展開

2 研究活動の概要

(1) 4月18日 研究組織づくり，研究主題の設定，計画立案

(2) 6月12日 第1回研究授業

第2学年「二つの説明を比べて，商品の『紹介カード』を作ろう」

(教材文「ふろしきは，どんなぬの」東京書籍)

授業者 まんのう町立四条小学校 教諭 田中 晶子

指導者 まんのう町立琴南小学校 教頭 篠原 智子

(3) 7月25日 支部夏季研修会 香小研夏季研提案の事前検討会

提案者 多度津町立豊原小学校 教諭 今井 美和

善通寺市立竜川小学校 教諭 坂本 陽子

指導者 まんのう町立長炭小学校 校長 大林 博子

(4) 11月14日 第2回研究授業

第1学年「いろいろなおはなしをよんで，じんぶつのすきなところを見つけよう」

(教材文「おとうとねずみチロ」東京書籍)

授業者 琴平町立琴平小学校 教諭 玉田 莉采

指導者 まんのう町立琴南小学校 教頭 篠原 智子

3 研究内容

第1回研究授業では，「二つの文章を比べ同じところを見付けることで，カードに書かれている内容が，商品の良さがわかる大事なところであることを読み取ること」という読む能力の育成を目標とした授業が提案された。

単元構成は，第1次でデパートの店員になって商品の紹介カードを書くという単元を通しての学習活動を確認し，ふろしきの例からカードの書き方を考えていく見通しをもてるようにした。第2次では本とカードの二つの文章の特徴を比べながら内容を読み取り，ふろしきの文章からカードの作り方のヒントを得られるようにした。第3次では自分が選んだ商品の本の文章を読み，商品の良さが分かる「紹介カード」を作り，デパートの店員になったつもりで商品を紹介するという言語活動を取り入れたものであった。

本時は，紹介カードを書くうえで最も重要な「カードに書く内容」を扱った。ふろしきのカードに書かれた文章が，本のどの文を書き抜いているのかを発見し，どうしてその文を抜き出しているのかを考えていくようにした。児童は，カードの文章と本の文章を対応させて同じ内容の文に線を引いたものをペアや全体で交流した。意見の交流を通して，自分の考えを変えたり付け加えたり省いたりして，大事な部分を読み取っていった。

指導者からは，本実践では「紹介カード」は「読むこと」の観点から，事柄の順序を捉えて文章中の重要な語や文を考えて選び出すという位置付けで取り組むとよい等の指導があった。

第2回研究授業では，「チョッキをもらった時のチロの行動や会話に着目し，声に出したり動作化したりすることを通して，気持ちを捉え，チロの好きなどところを見付ける」ことに焦

点を当てた授業が提案された。チロの好きなところをカードに書く活動を通して、自分がこれまで読んできた本の「大好きカード」を作成し、人物の好きなところを紹介する言語活動を設定していた。

単元構成は、第1次は「大好きカード」を作るという単元を通しての学習課題を与え学習への意欲をもたせた。第2次では、場面ごとに行動や会話に着目し、チロの好きなところを見付け、その好きなところを紹介する活動を行った。第3次では、第2次での学習を生かして作成した「大好きカード」を基に友だちと交流し、紹介された本を読み、感想を伝え合った。

本時では、前時まで「絵」「会話・行動」「動作化」からチロの好きなところを読み取るところを繰り返し行っていたので、見通しをもって意欲的に学習に取り組むことができていた。そのため、チョッキを着たチロの絵から児童は「横に向いている」「にっこり」「チョッキを触っている」等、多様な意見が出た。また、動作化では、実際に窓のほうを向いて遠くに呼びかけることでチロの気持ちに寄り添うことができていた。この他、赤や青の毛糸やプレゼントの箱、チョッキ等の具体物が用意されており、チロの気持ちを豊かに想像できる手立てを講じていた。

指導者からは、児童が、もっと物語を読みたいと思うために、児童一人ひとりの力を使って、豊かに想像させる授業作りが求められているという指導があった。そのために、児童の発言に対して問い返し、全員で考えていくことが大切であるということ、深まりを実感するために授業の最初と最後でチロの好きな所を比較すること、個人がもっている考えを価値付けるために繰り返しペア活動を取り入れること等が挙げられた。

4 県の研究との関連

【今年度の研究での成果】 関心を高める

第1回、第2回の研究授業でも、付けたい力に関連した学習課題を第1次に設定し、単元を通して目的意識をもって学習に取り組むことができた。さらに、読み取るための観点を明確にしたり、低学年に有効な具体物や動作化を取り入れたりすることで、意欲的に学習することができた。

【今年度の研究での課題】 対話的な学び、深い学び

ペアやグループで何について話し合うか課題を教師が明確にもつことで、入れるタイミングや回数が厳選され、より活発な対話をさせたい。また、児童の発言を繋いだり問い返したりする発問や助言をすることで、児童の学びを深くさせていきたい。

丸亀市部 研究のあゆみ

1 研究主題

子どもが自ら学ぶ国語科学習の展開
ー付けたい力を明確にし、その力につながる子どもの「関心」を高めたり
「自信」をもたせたりする授業づくりー

2 研究活動の概要

- (1) 4月18日 城坤小学校 研究組織作り、研究主題の設定、年間計画作成
- (2) 5月30日 城東小学校 授業研究・討議
2年 『お手紙』 ～登場人物の様子を考えて、音読しよう～
- (3) 11月28日 垂水小学校 授業研究・討議
6年 『町の未来をえがこう 町の幸福論ーコミュニティデザインを考える』

3 研究内容

- ・ 2年『お手紙』では、①発表の仕方や根拠の見つけ方を丁寧に行い言葉の価値付けを繰り返すこと、②学びのまとめとして音読を取り入れたりペアや全体での話し合い活動を設定したりすることで伝えたいという気持ちを高め主体的に自分の思いを表現する力を高めることを目指した。
そのために、以下の6点に留意した。
 - ① 導入として手紙をあげたりもらったりした経験を話させた後、「お手紙」の「お」の意味を考えさせる。
 - ② がまくんの様子や気持ちが分かる言葉に線を引かせ、そう思った理由を考えさせる。
 - ③ 話し合いの中で音読の時間（ペア、全体）をとり、読み取った気持ちを音読で表現できるようにする。その際、自ら発言できるように、音読したい文とどう読みたいかをノートに書かせる。
 - ④ 授業の最後には、話し合いを通して分かったことや友達の考えのよさについて書かせ、自分の考えの深まりを気づかせる。
 - ⑤ 振り返りの文章を載せたお便りを配布し、認め合う場としての意欲付けだけでなく、よい書き方の見本として紹介していく。
 - ⑥ まとめでは、「お手紙」で学んだがまくん、かえるくんの気持ちや自分ができるようになったことをがまくんへの手紙として書く。

授業後の討議では、次の３点を中心に話し合った。

- ① 叙述を基に考える力を高めることについて
 - ・ ワークシートを工夫する。
 - ・ 意図的に指名する。
 - ・ 問い返しを工夫する。
 - ・ 本文や既習事項を掲示する。
- ② 音読について
 - ・ 語のまとまりや言葉の響きを大切にする。
 - ・ 教師による音読のモデルを提示する。
 - ・ 音読の工夫が書き込めるようなワークシートを工夫する。
- ③ 学習内容を日常生活につなぐことについて
 - ・ 他の物語で活用する場を設定する。
 - ・ 他学年へ読み聞かせをする場を設定する。

特に、本時の場合、言葉を通した理解・表現とは、「がまくんの気持ち」（対象）、どんな言葉で表されているか。（言葉）」を考えていくことである。叙述に基づいて考えることが大切である。

また、国語科における思考力・判断力は、場面の様子に着目して、登場人物の様子を具体的に想像することである。そのためには、まず、場面の様子や登場人物の行動の大体をとらえ、場面同士を結びつけて考える力を育てることが大切である。さらに、叙述から、登場人物の行動、表情や口調、様子を想像し、行動の理由を考えることが大切である。

- ・ ６年『町の未来をえがこう 町の幸福論—コミュニティデザインを考える』では、集めた情報を目的に応じて取捨選択したり加工したりする力を育てることを目指した。また、複数の資料から読み取った情報を効果的に活用することができる力を育てることも目指した。

そのために、以下の４点に留意した。

- ① 言語活動の設定
 - 自分たちの町について書かれている本や資料を読んだりインターネットを活用して調べたりして、自分たちの町「垂水町」の未来についてプレゼンテーションを行うという言語活動を設定した。
- ② 学び合う場面の設定
 - ア ICT の活用
 - プレゼンテーションの様子を動画にとっておき、話し方と資料の見せ方の二つの観点から視聴をさせる。
 - イ 学び合うグループ編成の工夫
 - 同じ構成場所の友達と学び合う場を設定する。
- ③ 学習課題の設定
 - ア 身近で興味をもちやすい題材の設定
 - 身近にある問題を課題として設定することで学習に対する意欲の喚起、継続を図る。
 - イ 相手意識をもたせる。

総合的な学習を始めた3年生や、地域で活動している人々に視聴してもらうことを最終目的にする。

④ 教師行動の工夫、環境整備

ア 関連図書や地域の広報誌を収集し、並行読書ができるようにする。

イ アドバイスをする視点を明確にしておく。

授業後の討議では、次の3点を中心に話し合った。

① 視点の明確化について

- ・ 教師によるプレゼンテーションのモデルを提示することは有効である。
- ・ 指導事項の系統を意識し、既習事項を生かす。高学年では、聞き手のうなずきや表情に注意することが大切である。
- ・ 相手に応じて提示の仕方の工夫も変わってくる。そのためにも相手意識を明確にもたせておく必要がある。

② グループ編成の工夫

- ・ 共通の工夫を意識して共有しておくことが大切である。
- ・ 新たな視点からのアドバイスにつながり、効果的である。
- ・ 友達の発表を見ながら自分の発表を振り返ることができるという。

③ ICTの活用

- ・ 自分の発表を客観視することができる良さがある。
- ・ どの部分について話し合っているのかをもう少し明確にすることが、より具体的なアドバイスにつながる。
- ・ 1回目（授業前）と2回目（授業後）を比較することで自分の成長を確認することができる。それは、自信につながる。

特に、本時は、新しく学習指導要領に加わった内容を提案する授業だった。この授業を終えて、こんな子どもになっているという。

① ICTを活用したい。ICTの有効性を感じている。

② 友達に見てもらってアドバイスをしてもらおうと思っている。友達の発表を見て、その良さを取り入れようと考えている。（学び方が身についている。）

4 県の研究との関連

【今年度の研究での成果】 「関心」を高める。

- ・ どの授業研究でも、子どもの生活経験と結びついた単元構成を行った。その結果、子どもは、意欲的に学習に取り組むことができた。
- ・ 6年『町の未来をえがこう 町の幸福論—コミュニティデザインを考える』では、ICTを活用し、教師によるモデルとなるプレゼンを提示した。また、各児童のプレゼンを動画にとることで各自のプレゼンを客観視できるようにした。その結果、子どもたちは、身に付けたい力に対する「関心」を高めることができた。

【今年度の研究での課題】 「自信」をもたせる

- ・ 「自信」をもたせるためには、成功経験を積むことが大切である。既習事項とのつながりを実感することができるよう単元構成を工夫したり、その単元の学習を通して身につけた力を実生活で生かしたりすることができるよう工夫したい。

小豆支部 研究のあゆみ

- 1 研究主題 付きたい力に対する子どもの「関心」を高めたり「自信」をもたせたりする授業づくり

2 研究活動の概要

(1) 4月26日(木) 土庄小学校 研究組織作り, 研究計画の立案

(2) 6月21日(木) 土庄小学校

① 11月の研究授業に向けての教材研究

② 指導・講話 指導者: 香川県教育センター教育研究課長

(3) 11月15日(木) 土庄小学校

授業研究 2年

「1年生となかよくなるためのあそびのやくそくを話し合おう」

(『あそびのやくそくを話し合おう』)

指導者: 香川県教育センター教育研究課課長

3 研究内容

(1) 1回目の研修について(6月21日)

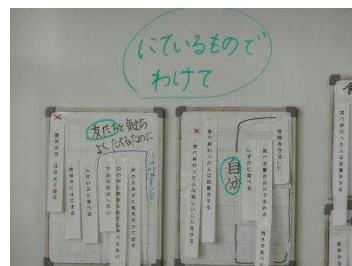
2回目の研修で扱う教材を実際に使って以下の流れで教材研究を行った。

① 「給食中のルールを決めよう」をテーマにグループで意見をまとめる場面の模擬授業を行うにあたって子どもから出そうな意見を短冊にしておく。(事前)

② 3～4人のグループに分かれて子どもの立場で模擬授業を行う。

③ それぞれのグループが、まとめ方の観点を説明しながら全体交流を行う。

実際に子どもの立場で考えてみる形の演習は、授業づくりを考える上で大いに役立った。指導者からは、新学習指導要領を踏まえた国語科の授業について、主な改善点を中心に、授業における単元構成の工夫や資質・能力を育成する授業づくりについて指導を受け、大変有効な研修となった。



(2) 2回目の研修について(11月15日)

「1年生となかよくなるためのあそびのやくそくを話し合おう」(『あそびのやくそくを話し合おう』)の授業研究を行った。1回目の研修で得た成果を元に、授業者が児童の実態に合わせて指導法や教材を工夫しながら授業を行った。事前の教材研究によって、児童に与える教材、扱う題材の検討がよくなされており、話し合いが活発に行えていた。教室の側面掲示には、前時までに身に付けた力を板書写真や掲示物によって適宜振り返ることができるように分かりやすく掲示され

ていた。また児童のノートにも学びの記録がしっかりと残されていた。単元全体の学習の積み重ねを大切にし、スモールステップでの確実な指導の成果が表れており、児童がその単元の内容を着実に理解し、習熟し、自信をもって話し合いに参加している様子うかがえた。教材の内容、指導内容や指導する順序の検討、既習事項の定着を図る方法などの点において提案性があり、実り多い授業研究となった。



(3) 成果(○)と課題(●)について

- 1回目の研修では、話し合う際に身に付けたい力がどのようなものかを部会員全員で考え、その単元で付けたい力の分析が細かくできた。その上で模擬授業を行ったことで、部員が主体的に研修に参加でき、後の授業参観の視点が明確になった。
- 香川県教育センター教育研究課長に指導をいただいた。授業改善に向けて、言語活動の創意工夫や発問の工夫を通して児童の深い思考を促すことなどについて具体的に教えていただくとともに、国語科の学習評価の在り方について指導を受けた。新学習指導要領についての解説を含め、国語教育全体という広い視野から、本時の授業内容について細部まで指導していただいたことで国語科授業づくりの理解が深まった。
- 単元を通して子どもに身に付けさせたい力を明確にし、目指す目標に向かっての授業をつくる必要がある。問い返し等で、深い授業展開を図ることがさらに大切である。

4 県の研究との関連

【今年度の研究での成果】 「関心」を高める・「自信」をもたせる

子どもの生活経験と結びついた単元のめあては、「やってみたい」、「工夫したい」という意欲にもとづいた思考を促すことが分かった。話し合うには、自分の考えを理由とともに話す力や複数の考えを整理する力が必要である。その力を見付けたり使ったりしたいという関心を高めながら授業を展開したり、話し合いを支える素地を培い、スモールステップで課題を乗り越えたりしていくことで「できた」「もっとできそうだ」と前向きな思いをもてるようにする。また、ロールプレイによって見付けた力を使って、話し合いの力が身に付いていることを確認するサイクルで習熟を図ることで、単元を通して付けたい力に対する「自信」がもてることが分かった。

【今年度の研究での課題】

少人数でのグループで話し合った後、全体交流でそれぞれのグループでの話し合いの結果を交流する際に、意見交流が話し合ったことの確認だけにならず、練り合いになるような助言の工夫が必要である。